

〈書評〉囲む会編 『小田切秀雄研究』

和泉, あき / イズミ, アキ

(出版者 / Publisher)

法政大学国文学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文学誌要

(巻 / Volume)

65

(開始ページ / Start Page)

140

(終了ページ / End Page)

141

(発行年 / Year)

2002-03-24

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00020213>

『小田切秀雄研究』

和泉 あき

本書を送って頂き、パラパラとページをめくって小林裕子氏の「小田切秀雄と女性」に目が止まり、氏が小田切さんの結婚にふれて「女性にたいしてロマンティックで理想化したイメージを持つ反面、女性の中の悪魔的側面などは実感しにくいにちがいない。」と書かれているのを読んで、思わず笑ってしまっただ。もちろん、揶揄や批判の意味ではなく、「そうなのよ、全く」と言いたいような共感の笑いである。さらにいえば、近代ブルジョア社会の産物にすぎない結婚とか、子どもの誕生とかその他について、夫人のみならず小田切さん自身、ほとんどア prioriに肯定され、心から祝福されるのが常だった。「観念的放蕩」と自らいわれる所以なのだろうと思ったが、このことば自体、私は納得しているわけではない。

小田切さんが大著『私の見た昭和の思想と文字の五十年』の締めくくりで、自身の「自己嫌悪」と「意識のウラにあるニヒリズム」に触れ、重ねてほとんど絶筆に近い一九九九年十一月「群像」で再び「わたし自身の内部ではニヒリズムがはじまっていた」と拘わったことについては、一貫して旗を下されなかった「人間の顔をした社会主義」の追求という面のみを見ていた一部には意外という感じを与えたようだ。ここ数年はまるで

前世紀の化石の稀少価値を認めるような評価がむしろ多かったのだから。本書の巻頭におかれた立石伯氏の「終りなき青春」が、「近代的自我史観的な膠着した認識だとか、戦争責任追究に示されるような高飛車な批判の仕方」を言われる小田切批判をくつがえすために、ニヒリズムの掘って来る所以を、戦前の革命運動への参加と挫折、そして、いや増す時代の悪気流の中の屈辱と内面の憎悪から説かれたのは必然であろう。このことから掘り起して小田切さんの古典文学とその伝統の取り扱い方、さらに戦後文学と政治の中での活動を、その精神的な衝迫にまで分析を加えて、総合的な小田切秀雄論を展開された力作である。本書では立石氏以外にも小笠原賢二氏『面従腹背』という精神」は、これをとりあげ、「ニヒリズムある故に理想主義もまた強固」と結論づけておられる。それでなければ、半世紀にわたって小田切さんに親しんで来られるわけがない。加えて戦後五十年、数多の文学者の中でも群を抜いて活動の場が広がった小田切さんは、そうした過程でもニヒリズムの闇を肥え太らせる交渉がなかったとはいえない。しかし、それが小田切さん自身を内面から食いやぶるようなことにならなかったのは、小田切さんという人の本来的な意味での人の善さ、「人の善さ」などという軽蔑したように聞えて困るので、それは「人間への信頼」と言ってもいいが、生得の善き性^{さか}とでも言っておきたい。そして、小田切さんの「善き性」が最も開放的に、全面的に留保なしに発揮されたのが、「教師」としての小田切さんだったように思われる。本書でも勝又浩氏が「たたかう教養で」、語の本来の意味での「よき教師」であった小田切さん

について述べておられるが、本書刊行の母胎となった「小田切秀雄先生を囲む会」の十数年におよぶ歴史は、「はじめに」と「あとがき」に詳しい。会員数が三十人から六十人、百人とふえていった経過、「小田切秀雄研究会」「会員の新作をめぐる雑談会」と発展したいきさつは、その事自体、明治以後の大学の歴史において稀有のことであろう。今後はなおあろうとは思われない。すでに小田切さんの生前から企画が練られていた由である。私自身、「囲む会」の会合の様子や、メンバーについて何度も伺ったことがある。百人からおられるという会員のなかで、本書に寄稿しているのは「年譜」作成の森島稔氏を含めて十六人、三部構成というか、すでに触れた総体的な小田切評価をⅠ、とし、Ⅱ、では小田切さんの出発にとつて運命的な出会いであった北村透谷を論じた黒古一夫氏の「北村透谷論」をはじめ、作家・作品論評価が九本並ぶ。詳しく言う余裕はないが、この項は意外に論述の方法が難しいと思う。二、三焦点を結ばない憾みの残る論があった。ついでに触れておけば、藤田富士雄氏の「大正期労働文学と小田切秀雄」の項では、これは「私の見た昭和の……」で小田切さん自身の記憶が違っているのだ、氏の責任ではないのだが、日本近代文学研究所に関わって事実と相違する部分がある。また、清水節治氏の「小田切秀雄と文学教育」での綿密な資料整理にもとづく分析には敬服するのみである。

戦時下に踏晦の一手段でもあった古典研究にはじまり、早くから一貫した史観・方法論に立脚した小田切さんが、対象を近代に限らなかつたのは当然である。Ⅲ、ではそうした広い視野

からとりあげられた古典作品についての、戦前までの、小田切さんいうところの「手垢にまみれた」鑑賞のしかたと違う、主体的で客観的な鑑賞方法を論じられた川田正美氏と、小田切さんの最初の評論集『万葉の伝統』の改版を綿密に踏まえて、戦時下の「マルキスト小田切秀雄の微妙な内部」に立ち入った田中単之氏の論が収められている。源實朝の歌の評価にみられる揺れの追求など興味深かった。私自身の勝手な関心なのだが、堀田善衛の『方丈記私記』、『定家明月記私抄』などの比較対照をこれから期待したい。いろいろな意味で、堀田善衛と小田切さんという、ほぼ同世代の、すぐれた一人の文学者について、実は私は強い興味を感じている。

師の祖述ではなく、師が人生と文学に対してそうであったように、師に真摯に対峙し時に鋭く批判し、現代の困難な状況のなかで、師の最もよき部分を継承しようとする「……囲む会」の諸氏の力作が有意義な一冊となったことをよろこびたい。小田切さんという大きな存在に対する総体的な評価は、なお今後のことに属するであろうが、それらはすべてこの書を踏まえて立論されるであろう。

注 私には面と向つても向わないでも五十年間、小田切さんを「先生」とよんできた。これはもう固有名詞のようなもので、今、急に敬称ぬきで物を言うことは非常に難しい。迷ったが止むを得ずここでは「小田切さん」に統一させて頂いた。そうすると述語の方も当然合せざるを得ず、困るのだがお許し頂きたい。なお、私個人としては今後も小田切先生を客観的に語るつもりはない。

(いずみ あき・『文学的立場』同人・相模女子大学名誉教授)

▽二〇〇一年一〇月・菁柿堂・三五〇〇円